S-01

外傷性胸部大動脈損傷に対するTEVAR

【目的】近年、胸部大動脈瘤・解離に対するTEVARはその低侵襲性から確実に進歩し様々な疾患に適応を拡大している。特に、鈍的外傷性胸部大動脈損傷（以下BTAI）に対するTEVARは、大動脈瘤・大動脈解離診療ガイドラインでもClass Ⅰとなっている。【方法】当院では、1983年1月から2014年4月まで52例のBTAIを経験した。この内TEVARを行った4例について検討する。【結果】年齢は平均63.5歳（47～79歳）。男性3名であった。1例は受傷時に胸部大動脈峡部の仮性瘤が径33mmであり全身状態も安定していたため手術適応は無いと判断され退院後外来通院となっていたが、徐々に瘤が拡大したため受傷から5年後にTEVARを行った。受傷早期にTEVARとなった3症例はいずれもISSが高く（平均51）、合併損傷として頭蓋内出血や骨盤骨折などの出血性合併症を伴っていたため、ヘパリンを比較的多く使用する開胸による人工血管置換術ではなくTEVARを選択した。TEVAR群に死亡は無く、手術群は11%（5例）であった。全例landing zoneをzone 2に置いたが、いずれも問題はなかった。平均在院日数は41日（7～65日）であり、開胸手術を行った47例の平均在院日数67日より短い傾向にあった。【結論】BTAIにより搬送される患者の全てが、何らかの合併損傷を有するため、我々外科医はどの損傷から治療を優先するかについて適切に判断する必要があるが、特に出血性合併症を有する高齢者ではTEVARは非常に良い適応となると考えられる。ただし、若年者では解剖学的な問題からTEVARについては慎重に検討する必要があると考えられる。